

翻
訳

Charlotte M. Brane 著『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』(翻訳・その15)

堀 啓子

これまで『東海大学紀要 文学部』に連載してきた本稿は、『東海大学紀要 文化社会学部』に稿を移し、引き続き、『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』の翻訳を掲げる。原著は長編物語であるため、分載十五回目となるこのたびは、第二十章の訳を掲げることにする。猶、原著も引き続き Dodo Press の二〇一〇年リプリント版に拠るものとした。

*本稿は、科学研究費補助金【基盤研究(C)】「課題番号:18K00329」による研究成果の一部である。

二十章

アール卿夫人にとって、ズラリと並んで出迎える使用人たちの前を、この二人の少女を連れて通るのは誇らしい瞬間であった。二人は仰天のあまり一言も発さなかった。フロレンスを離れた時は幼

過ぎたため、彼女たちはあのアルノーの川のほとりの小ぎれいな家のことはほぼ何も覚えていなかった。彼女たちの思う家とはエルムスを中心だったーというのも他の家を見たことがなかったためだった。

アール卿夫人は、アールズコートを目見たときの二人の反応の違いに気づいていた。リリアンは青ざめた。彼女は震え、驚愕の瞳は涙でいっぱいになった。反対に、ベアトリスは、この館の真髄を瞬時に理解したように見えた。顔は紅潮し、輝く瞳には誇らしげな光が宿った。彼女は誇り高い顔を今まで以上に堂々と上げた。怖れず、怖気づかず、目新しい見慣れぬ壮麗さを前にしても怯むことはなかった。

少女たちは、新しい壮大な我が家に深い感銘を受けていた。何日もかけて、アール卿夫人は、この館の誇る数えきれないほどの貴重な美術品とその芸術性を見せていった。ベアトリスは絵画の飾ら

れている廊下が最も気に入った。「それぞれの逸話から由来する名前の冠された、偉大な祖先たちの肖像画を彼女は誇らしく思い、好んで眺めた。ある朝、彼女は極めて巧みな描写を称賛しながらアール卿夫人の肖像画の前に立った。そして急に、この絵の典雅なモデルであるこの祖母を振り向き、「代々のアール卿夫人は皆ここにいらつしやるけれど、お母様は何処でしょう？ お母様の顔はこれらの肖像画と同じように綺麗で美しいですわ。どうしてお母様の肖像画はないのでしょうか？」と言った。

「いつかは並ぶでしょう」とヘレナ夫人は言った。「あなたがたのお父様がすべての様子を見に戻られた時にはね。」

「私たちには兄弟がおりません。」とベアトリスは続けた。「代々の爵位は息子たちに受け継がれていたようですがーどなたがお父様の跡を継ぐのでしょうか？」

「次に近い血筋の」と、アール卿夫人は悲しげに言ったー「ライオネル・ダーシーという方です。彼はアール卿のいとこ（また従兄弟の子）にあたります。彼が、爵位と領地とともに相続するのですよ。」

彼女は深いため息をついた。ヘレナ夫人にとって息子の息子を見ることも、愛することも、かわいがることも、アールズコートの後継者を祝福することも叶わないことはとても辛いことだった。

リリアンはすばらしい庭園を見て最も喜んだ。そこは、多くの野生の木々が生い茂る森、花とシダに覆われた谷、立派な樹木が植えられたいくつもの小さな丘などからできていた。純白の百合の花々がその穏やかな胸に抱かれて眠り、柳がその澄んだ表面に雪を落としている、その湖を彼女は何よりも好んだ。だがその土手際に佇んだ時、ベアトリスはその透明な深淵を覗くと、身震いしてきびすを返し、足早に立ち去った。

「水には飽き飽きよ。」と彼女は言った。「ナッツフォードで一番うんざりしたのは。あの大きな、波の寄せ続ける海だったわ。私は生まれつき海に反感を持っているのに違いないわ。」

アールズコートでは何もかも目新しく、そのまま幾日も過ぎた。毎日が新しい発見の連続だった。

きれいなスイートルームがそれぞれ娘たちにあてがわれた。二人は館の西翼に住んで、いろいろな話をした。フロレンスから一緒に来たイタリア人の乳母は、ドラと残ることを選んだ。この二人の美しい娘たち付きのメイド探しとともに、アール卿の令嬢にふさわしい衣装ダンスを整えることにも、アール卿夫人は奔走した。

ヴィヴィアン夫人は、彼女が面倒を見ることになるこの娘たちの近くに二部屋を占めた。ロナルドの帰郷にはまだ数か月を要すると知ると、ヘレナ夫人はいろいろな決め事をした。娘たちは家族のごくわずかな友人に会う以外には、華やかな社交界からは遠ざけられ

ていた。彼女たちは、午前中に数時間の勉強をし、昼食後はヘレナ夫人と散歩やドライブをして、七時には夕食を共にし、居間で夕べを過ごす生活を続けていた。

それは新鮮で楽しい生活だった。ベアトリスは彼女を取り巻く豪華な贅沢を楽しんだ。彼女はあのエルムスでの静かな暮らしについて生き生きと話をし、アール卿夫人を楽しませた。

「私はここではくつろげますわ。」と彼女は言った。「あの家では決してくつろげませんでした。目覚めるときは、大きな榆の樹の葉擦れの音や、年老いたソーンの祖母が牛のことを尋ねている声にうんざりしておりました。お気の毒なお母様！母の趣味はわかりませんわ。」

彼女たちは新しい生活にさらに慣れてくると、自分たちの家庭における奇妙な不釣合にショックを受けた。一方では偉大な由緒ある家系、イギリスでも最も高貴な血縁同志の結婚による一族の結束——、壮麗な屋敷、爵位、富、身分、そして地位。他方では、素朴な農夫とその家庭的な妻、シンプルな古い農家、そして彼女たちの考える社会から完全に切り離された孤立。

なぜこんなことがありうるのだろうか？なぜ父親はアールズコートの主で、母親は素朴な田舎農夫の娘なのだろうか？初めて、両親の人生に謎があることに彼女たちは気づき、当惑した。若者特有の鋭い本能で自分たちの立場が不自然なものであることを感じとった二人

は、ともに今まで以上にエルムスについて語らなくなった。

時には、アールズコートに客が訪れた。ハリー卿と、ホルツハムのレディー・ローレンスは度々訪れてきた。グリノークからはレディー・カーテリスも訪れ、このアール卿の美しい娘たちを皆が温かく褒めたたえた。

ベアトリスは、その輝くような美貌に豊かな声、華やかで優美な振る舞いによって、明らかに、より好かれていた。ハリー卿は、彼女が国中で最も上手に馬を乗りこなしていると語った。

ある時、アール卿夫人が、自分の親友の娘であるレディー・カーテリスがアールズコートを訪れて数日滞在すると、この娘たちに告げた時は、準備のために大騒ぎが始まった。そして彼女たちは初めて、彼女たち自身の人生に深く関わっていた、この美しく品位のある貴婦人に会った。

ヴァランタイン・カーテリスは、もう「この領内の女王」ではなかった。ボルゲージ公は、この美しいイギリス女性の心を勝ち得ていた。彼は、グリノークまで彼女を追いかけて来て、求愛のためにいつぞやと同じ問いを繰り返して投げかけた。ヴァランタインは彼の気を惹くこともせず、彼への愛を感じてもいなかった——ただこのことを熟考し、今後、このイタリアからの求婚者ほど好意や尊敬を持つことができる相手に巡り会うことはないだろうと結論づけた。

彼は高潔で、過ちを犯さない人で、南国の申し子であった。とても

寛大で、王子の気風があり、美的センスに優れ、正しい信念を有し、騎士のように名譽を重んじた。恐らく、最も彼女を動かしたのは、彼女へ向けられた彼の深い愛情であつた。さまざまな意味で、彼女の知る誰よりも、彼はロナルド・アールに似ていた。

両親は大いに喜び、カーテリス嬢は彼を受け入れた。彼女のために、この公爵は一年おきにイギリスに滞在することに同意した。

この立派なイタリア人と彼の美しい妻が領地中から歓迎されることは三回に及んだ。そしてこの度が彼らの四度目のイギリス滞在となり、公爵は、妻が、その幼少時に出会つたことがあるというロナルドの二人の娘がアールズコートにおり、ぜひとも訪ねて行きたいと願つてゐることを知つた。

この若い娘たちは驚きと称賛の眼差しで、この貴婦人に見とれた。これほどまばゆく麗しい人に出会つたことはなかつた。彼女には落ち着いた品格があり、その顔立ちには美しいギリシヤ型であつた。豊かな金髪のとりにく美しく頭部から、スラリとした長身にまで、二人はすっかり魅了された。この娘たちを抱きしめてキスした時、ヴァランティンは、あの庭での青ざめた激昂した顔と、彼女への激しい怒りに燃えたあの暗い瞳をまざまざと思い出した。

「昔、あなたがたのお母様を存じておりました。」とこの女性は言つた。「お母様から私の名前をお聞きになつたことは？ フローレンスのあの小さなお家で、私はあなたがたをよくあやしてましたのよ。」

私はあなたがたのお父様の昔の友人の一人なのです。」

だが彼女たちは聞いたことはなかつた。そしてベアトリスは、こんな女王のように美しい人を、母親が知つていて忘れることなどあるうかと思ひに思つた。

その一週間は長くすばらしい夢が過ぎたように、ベアトリスには思へた。ベアトリスは、ほとんどヴァランティンを崇拜していた。これが、彼女が長い間、憧れていたことだつた。この女性こそが、彼女が長い間、知りたいと望んでいた楽しくすばらしい社交界に生きる、理想的な貴婦人の一人だつた。

この公爵夫妻はアールズコートを発つとき、ベアトリスとリリアンにフローレンスを訪ねさせるように、とヘレナ夫人に約束させた。夫妻は、あの綺麗で魅惑的なロザリー伯爵夫人が未だに社交界に君臨していることを話し、この少女たちの父親を知る彼女が、少女たちをきつと温かく迎えるであろうことを告げた。

「あなたはイタリアの話が大好きなのですね。」とヴァランティンはベアトリスに言つた。「イタリアは、まさにあなたの好きな物語のような土地なのです。青い空と陽のふりそそぐ海、花の咲き誇るブドウにキンバイカ、そしてオレンジの木々。そんな豊かで美しい光景を目にしたら、あなたはあの寒くて荒涼としたイギリスに戻りたくなくなるでしょう。」

こうして話は整い、アール卿が戻ってきたら、彼らはその地を訪れることになった。この客たちが去った後は長くわびしい夕べになった。

「お母様に手紙を書きましょう。」とベアトリスは言った。「お母様がお友達のことを何も仰らなかつたなんて変だわ。あの方がいらつしやつたことをお母様にお知らせしなければ。」

敢えて、少女たちにはドラに対して何も隠し立てをさせなかつたため、アール卿夫人は娘たちが手紙を書き送ることを許さざるをえなかつた。高ぶつた、しかし物寂しい気持ちで、ベアトリスはあらゆる言葉を吟味した。ベアトリスは、あの女王の落ち着いたすばらしい美貌や、優美で上品な立ち居振る舞い、ドラへの温かい記憶、自分たちを熱心に招待してくれたことなどを、愛情にあふれる称赞をこめて書き綴つた。ドラは静かに読みとおしたが、一語一語が鋭い痛みを以て突き刺さつた。そして昔の激しい怒りが心にわき起こり、優しい想いをすべて打ち碎いた。ヴァランタインのことばかり記されたこの手紙を、ドラはちりぢりに引き裂いた。

「あの女は私の夫を私から引き離した。」彼女は叫んだ。「そしてあの綺麗な顔をした破廉恥な美人は、今度は子供たちを奪おうとしている。」

それから、嫉妬に満ちた怒りの激しい嵐の中に、一筋の光明のようにある思いが浮かんた。ヴァランタインは結婚したのだった。彼

女は、ロナルドの後援者であつた裕福で実力のある公爵と結婚してゐた。だから結局のところ、もし彼女がロナルドを誘惑してドラから引き離したとしても、彼は彼女にはなびかないだろうし、彼女自身も彼に構うのをすぐに止めたであらう。

自分の長い熱心な手紙に対するドラの返事が来た時、ベアトリスは、いつそう不可思議に思つた。ドラは、ボルゲージ公爵夫人について何も言わなかつたのは、ただ、思い出したくない人だつたから、とだけ書いてよこした。

十五カ月が経ち、ついにアール卿から、クリスマス前にはイギリスに帰国するつもりで、何があつてもクリスマス当日は共に過ごしたいという手紙が届いた。それは旅路で急いで書かれた短い手紙だつた。娘たちの心に最も響いたのは、その中のこんな言葉だつた。「アールズコートに娘たちを引き取つて戴いたことを嬉しく思つてゐます。あの子たちが^(註)どんな風に育つたかとても気になります。母上、どうかあの子たちを幸せにしてやつて下さい。欲しがるものは何でも与えてやつて下さい。そして、私が長い間放つておいた後ですが、能うるならば、あの子たちに私を愛するように教えてやつて下さい。」

この手紙には、彼女たちの母親については一言もふれられておらず、示唆する文言さえなかつた。娘たちは少し震えながら時が経つのを待つてゐた。最終的に、もしも自分たちには記憶にない父が、

自分たちを気に入らなかつたらどうなるのだろう。ベアトリスはそんなことがあるうとは考えなかつた。だがリリアンは緊張し、名状しがたい恐怖に長い時間苛まれていた。

以前の生活がすっかり忘れ去られていくのは奇妙なことだった。

あの家庭的な農夫とその妻である祖父母に、二人ともある種の温かい愛情は持つておりー彼らにたくさんのプレゼントも贈ったーだがベアトリスは、「我々ゾーン夫妻より、アール卿夫人への最上の敬意と感謝をこめて。」と大きな声で彼らの手紙を読み上げるときは、その誇り高い唇を軽蔑にゆがめるのだった。

アール卿夫人は息子の帰郷に際して、何らの不安も持たなかつた。彼の娘たちには何ひとつ問題はなかつた。ベアトリスは完成された優美さを備えており、これ以上何を望むことができようか？二人が共に、少しもゾーン家の人々に似ていないことを、彼女は密かに神に感謝していた。ベアトリスは、代々のアール卿夫人たちのうちの一人にそっくりで、まさにその肖像画から飛び出してきたようだった。リリアンは綺麗で鳩のような愛くるしさを持ち、大人しくてチャミングだった。アール卿夫人がーこれほど誠実で名誉を重んじるー彼女が、彼らの好きなアール家の顔立ちを受けつぐ快活な少女が、誰も知らぬうちに、商船の船長に誓いを立てており、彼が二年後に彼女を妻にすることになっているなどということに、いったいどうして思ひよるはずがあるうう？

アール卿夫人にはベアトリスの将来についてある計画があつた。

夫人は、彼女がいつの日かアールズコートのアール卿夫人になることを夢見ていた。それは、ベアトリスが、この領地の若き後継者であるライオネル・ダーシーと結婚してくれることで、それほど喜ばしく、心安らぐことはなかつた。

ある朝、姉妹たちがリリアンの部屋に座っていると、アール卿夫人が美しい上品な顔に、常にはない興奮を浮かべてこの部屋に入ってきた。彼女は開封した手紙を手にしていた。

「ねえ、あなたたち」と彼女は言った。「今夜は最高に綺麗にしていらつしゃいね。ここに連絡が来ましたーあなたたちのお父様が今夜お帰りになりますよ。」

そこで落ち着いた、誇り高い声は言いよどみ、品位あるアールズコートの女主人は、息子の帰郷を思い涙したが、それは彼が去ってから初めての涙だった。(以下、次号)

(注1) 原文は、底本としているリプリント版では hem となつており文脈上不自然であるが、Street & Smith 社版 New Bertha Clay Library No.70 の *Dora Thorne* (1900) を参照し、該当箇所をこれに従い them として翻訳した。